土台を据える
岩の上に建てる

私たちは経験から、ある状況の中に神の力を解放する何よりも効果的な方法は、信仰によって神のことばを宣言することだと分かってきました。実際、私はそのことについて繰り返し語ってきましたが、言い飽きることはありませんでした。もし、私が「宣言」という武器を使うことを学ばなかったら、妻も私も、今日このように生きているかどうかわかりません。私たち夫婦は、それぞれ違った時期に重い病気を患ったことがあり、私は致命的な病気を経験しました。しかし今日、私が生きて主に仕えることができていることを、医者と神さま、そしてみことばの力に感謝します。

今日は「土台を据える」というシリーズにふさわしい、イザヤ 55 章 10-11 節を宣言したいと思います。

> *「雨や雪が天から降ってもとに戻らず、必ず地を潤し、それに物を生えさせ、芽を出させ、種蒔く者には種を与え、食べる者にはパンを与える。そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。」*
> アーメン。

このシリーズ最初のメッセージのタイトルは、「岩の上に建てる」です。そのことから始めたいのです。聖書は良い教えの模範であり、さまざまな教えの原則に従っています。特に、人々がすでに知っていることから語り始め、知らないことへと人々を導きます。人々が知らないことから始めることは決してしません。知っていることから始めて、徐々に知らないことへと進んでいくのです。聖書の教え方の一つは、非常にシンプルで身近な日常の経験や活動を取り上げ、それを霊的に適用することです。様々な例があります。種を蒔く農夫や、網で魚を取る漁師、武具を着けた兵士などについて語っています。また、まったく別の文脈では、婚礼のために準備する花嫁について語っています。これらは、この原則のほんの一例に過ぎません。

しかし、私が特に注目したいのは、建物を建てるという身近なことです。クリスチャン生活のこの描写は、聖書の中の他の描写と同じくらい多く用いられていると思います。

最初に、ユダの手紙 20 節、21 節を見てみましょう。私たち信者への勧めのことばが書かれています。

> *「しかし、愛する人々よ。あなたがたは、自分の持っている最も聖い信仰の上に自分自身を築き上げ、聖霊によって祈り、神の愛のうちに自分自身を保ち、永遠のいのちに至らせる、私たちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。」*

この聖句は、私たちは最も聖い信仰の上に自分自身を築き上げなければならないと言っています。その方法の一つが、この「建てる」という比喩です。私たちは自分自身を築き上げる責任があります。

そして、エペソ 2 章 21、22 節では、主の聖なる宮について語られています。

「この方にあって、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、このキリストにあって、あなたがたもともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。」

これは、神の住まいとして聖霊によって共に築き上げられたクリスチャンのコミュニティについて語っています。

そして、第一ペテロ 2 章 4-5 節では、生ける石であるイエスについて語られています。ペテロはこう言っています。

「主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが、神の目には、選ばれた、尊い、生ける石です。あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。」

このように、私たちは一人ひとりが組み合わされて、主が住む聖なる宮を築き上げていく、生ける石にたとえられています。

そして最後の例は、使徒の働き 20 章で、パウロが特別な愛をもってエペソの長老たちへ送った別れの言葉です。エペソでのパウロの奉仕は、どの地域よりも大きな成果をもたらしました。この中でパウロは別れの挨拶を告げ、そしてエペソの人々がこの地上で自分（パウロ）を再び見ることはないだろうと伝えます。それは彼らにとって非常に悲しいことだったに違いありません。この使徒の働き 20 章 32 節こそ、パウロが彼らに遺したかった最後のものでした。

「いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあって御国を継がせることができるのです。」

ここでパウロは、私たちを建て上げる主な手段は、神の恵みのことばである聖書だと言っています。そして、みことばは私たちを育成し、イエス・キリストへの信仰によって聖なるものとされた人々の中で御国を相続させることができると言っています。

私は建築家ではありませんが、一つのことだけは知っています。それが煉瓦や石、コンクリート、あるいは木材であっても、重要な部分は基礎（土台）であることです。聖書は特にこのことを取り扱っており、それは私たち一人ひとりに非常に重要なものです。土台は、その上に建てることができる建物の大きさや重量に制限を設けるので、適切な土台が必要です。土台が制限を設けるのです。これはクリスチャン生活においても同様です。土台の許容範囲以上の成功したクリスチャン生活を建てることはできません。これは重要な問題です。あなたの土台はどうでしょうか。あなたは正しい土台を据えていますか？

実は、正しくて十分な土台は一つだけです。それはイエス・キリストです。パウロはコリントのクリスチャンに宛てて書いたコリント人への手紙第一 3 章で、二つの比喩を用いています。農業のたとえから始めて、建築のたとえに進んでいます。9 節から 11 節です。

「私たちは神の協力者 ［神とともに働く者］ であり、あなたがたは神の畑 ［農業的比喩］、 神の建物です ［建築的比喩、パウロは続けて建築的比喩を用いています］。与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。しかし、どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければなりません。というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。」

このように、クリスチャン生活の土台はただ一つしかなく、それはイエスご自身であると、パウロは言っています。その土台の上に建てられていなければ、試練や困難の時に耐えることができません。ですから、私たち一人ひとりが、自分の人生が何の上に建てられているかを見極めることは非常に重要なのです。私たちは本当に主イエス・キリストの上に建てているでしょうか？　私たちはイエスと個人的な交わりを持っているでしょうか？　またイエスと個人的に交わることを可能にする、イエスについての知識を持っているでしょうか？

イエスにある土台を据えるということは、極めて重要です。ですから、この土台、すなわち私たちの人生におけるイエスの土台をどのように据えるかについて考えていきます。今、一人ひとりが自分自身の生活、また霊的状態、霊的経験を吟味して、この土台が正しく据えられているかどうかをチェックしていってください。

いくつかの基本的な教えを、マタイ 16 章から見ていきましょう。13 節以降で、イエスが弟子たちに語っているところです。

「さて、ピリポ・カイザリヤの地方に行かれたとき、イエスは弟子たちに尋ねて言われた。『人々は人の子をだれだと言っていますか。』」

それから、イエスはそれを非常に個人的な質問をしました。15、16 節

「イエスは彼らに言われた。『あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。』シモン・ペテロが答えて言った。『あなたは、生ける神の御子キリストです。』」

これは、ペテロの人生において、またキリスト教の歴史全体において、重要な瞬間でした。16－18 節。

「『あなたは、生ける神の御子キリストです。』するとイエスは、彼に答えて言われた。『バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。』」

このように、イエスはペテロとのこの体験を用いて、私たちがイエス・キリストにある土台を据えることができる方法を確立されたのです。

最初に、ここで用いられている言葉のいくつかを説明します。18 節でイエスは、「あなたはペテロです」

と言っています。ギリシャ語では「ペトロス」です。また「この岩」とは、ギリシャ語では「ペトラ」で、その上に「私の教会を建てます」と言いました。ペテロは教会の基礎だとよく言われます。もしそうであるなら、それは非常に不安定な建物だと言えます。なぜなら、この少しあとにイエスはペテロに、「下がれ、サタン！」と非難したからです。その後、ペテロは 3 度も主を否定しました。復活のあとも、パウロは同胞のユダヤ人を恐れて、福音の真理に妥協した彼を非難しなければなりませんでした。ですから、教会がペテロの上に建てられていないことを感謝します。

実際にこの箇所から明らかにされていることは、ギリシャ語聖書の原文でも非常に明確で、新改訳聖書では脚注にあるように、「あなたは、ペテロ（ペトロス）で、この岩（ペトラ）の上に私の教会を建てます」ということです。「ペトロス」とは、ギリシャ語では「大きな石」という意味です。通常、人々が誰かと一緒に運ぶような大きな石です。一方、「ペトラ」は岩盤から突き出た「ごつごつした岩」という意味です。それは崖のような規模です。しかし、重要なことは、それが岩盤の一部であるということです。岩盤とは何でしょうか。まさにペテロが経験した、聖霊によってのみ明らかにされる、「イエスとは誰であるか」という認識です。聖霊によって、父なる神が聖霊によってイエスが誰であるのかを啓示してくださらなければ、誰一人、本当の意味でイエスがどのような方であるかを知ることはできません。

ですから、このペトラこそ、クリスチャンの信仰の基礎とならければならない岩盤です。それは、大工の息子としてでも、歴史上の人物としてでもなく、永遠であり、被造物ではない神の御子イエスとの個人的な出会いと、個人的な啓示です。私たちが岩の上に建てようとするなら、イエスと個人的な出会いをしなければなりません。ペテロが体験したことが、私たちの体験にもならなければなりません。

教会に通っても、宗教的儀式に参加しても、祈りをささげても、人は変えられません。しかし、イエスと本当の出会いをすれば、あなたは変えられます。イエスに出会って、何も変わらない人はいません。ですから、私たち一人ひとりが、「私は主イエス・キリストと、人生を変えるような個人的な出会いをしたことがあるだろうか」と自問する必要があります。

ペテロがこの出会いによって経験した 4 つの段階について説明しましょう。第一段階は、**対面**です。イエスとペテロは、顔と顔を合わせて出会いました。仲介者も祭司もなく、彼らの間には誰もいませんでした。直接で個人的なイエスとの対面です。それこそ、私たちが体験しなければならないことです。イエスは別の箇所で、こう言われました。*「わたしは門です。だれでも、わたしを通って入るなら、救われます。」*　神の国に至る道は一つだけで、それはその門を通ることです。門とは、教会でも教理でもなく、イエスです。「わたしは門です。」

第二段階です。対面に続いて、父なる神が聖霊を通して与えた**啓示**がありました。イエスは*「このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく」*と言いました。ここの「人間」というのは、直訳すると、「肉と血」です。それは、私たちの生まれつきの感覚では理解できないので、啓示が必要です。繰り返しますが、啓示が不可欠です。個人的な啓示がなければ、誰も、永遠の神の御子としてのイエスを知ることはできません。あなたは神学を学んだり、聖書学校に行ったり、牧師になることもできます。しかし、イエスとの個人的な啓示がなければ、イエスを知ることができません。この啓示は、御子イエス・キリストを通して父なる神から与えられるのです。

あなたはイエスと個人的な出会いをしましたか。私は 50 年以上前、第二次世界大戦中の陸軍のバラック小屋の中で、真夜中にイエスと出会いました。私には教理の知識は全くなく、福音的な言葉も聞いたことがなく、その時は自分が救われたとか、生まれ変わったとか言うこともできませんでした。そのようなことはすべて、あとで知るようになりました。しかし、私は変えられました。劇的に、そして永久に変えられたのです。完全にされたのではありません。実際、私は今もまだ完全ではありませんが、私は良い方向に変えられたのです。

第三段階は、聖霊が私たちに示してくださることを、**認めなければならない**ということです。私たちは、「そうです。私は信じます。受け取ります」と言わなければなりません。何らかの応答をしなければなりません。それは自動的なものではなく、私たちの内で何かが起こらなければならないのです。

そして、第四段階は、イエスへの**信仰を公に告白**しなければなりません。イエスはペテロを、「あなたは、生ける神の御子キリストです」と告白するように導きました。ペテロはそれを公に告白しました。隠れた信者がいることは私も知っています。特に、自分が信者だと認めると命の危険もある国には、隠れた信者がいます。しかし、すべての人が永遠に隠れた信者のままでいることはできないと思います。

マタイ 10 章 32、33 節、でイエスはこう言っています。

> *「ですから、わたしを人の前で認める者はみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。しかし、人の前でわたしを知らないと言うような者なら、わたしも天におられるわたしの父の前で、そんな者は知らないと言います。」*

イエスの方法の特徴は、選択肢を 3 つではなく、2 つだけにすることです。イエスを告白するか、否定するかのどちらかです。もし、適切な状況で告白しなければ、事実上、否定したことになるのです。ですから、私たち一人ひとりは、ある時点で主イエス・キリストへの信仰を公に認めなければなりません。これは、多くの人にとって重要な瞬間です。

私はクリスチャンになった後、誰に対しても最初に出会ったときに、自分の立場を相手の人に知ってもらうというのが最善であると分かりました。そうすると、後になって「いや、最初に言っていなかったんだけど、実は…」と言う必要がありません。ですから、私は宗教的行為としてではなく、自分のバラック小屋で毎晩ベッドにひざまずいて祈ることにしました。そうすることで、自分がどういう者であるかを周りの人たちに伝えたのです。そうすると、とても楽になりました。あいまいな態度で、自分が信じていることをはっきりと言わないクリスチャンたちは、あとになって自分の信仰について話すことが難しくなります。ですから、みなさんにお勧めします。路傍伝道をする必要も、説教者になる必要もありません。主婦や学生でいいのです。しかし、あなたが置かれている場所で、あなたが神の御子イエスを信じていることを知らせましょう。

では、この出会いの四段階をまとめましょう。これらは私たちの個人的な人生において、どのようにイエスの土台を据えるかという基本となるものです。

第一段階、**対面**がありました。

第二段階、父なる神が聖霊を通して与えた**啓示**がありました。
第三段階、ペテロは、**認める**応答をしました。
第四段階、ペテロは、**公に告白**しました。

「そのような啓示は今も与えられますか」と尋ねるかもしれません。ペテロや他の弟子たちが個人的に経験したことを、私たちも同じように経験できるのでしょうか。

二つの重要なことを理解する必要があります。一つ目、イエスは自分が大工の息子であることをペテロに啓示したのではありません。ペテロは以前からイエスが大工の息子であったことを知っていました。イエスはペテロに、永遠の神の御子として啓示したのです。ヘブル人への手紙 13 章 8 節にこう書かれています。

「イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも、同じです。」

イエスは変わることのないお方で、またこれから変わっていくこともありません。その啓示とは、言葉や文化、服装のことではなく、イエスという永遠のお方についてです。それこそ、ペテロがおそらく人生で初めて経験したことです。ペテロはイエスがどのようなお方であるかの啓示を得たのです。

二つ目に、その啓示は聖霊を通して与えられました。聖書は、聖霊を「永遠の霊」、「時間を超越した霊」と呼んでいます。時、流行、歴史、習慣、言語、そのようなものは聖霊を変えることはできません。

この二つ（1. 啓示されることとは、イエスが神の永遠の御子であること、2.　イエスを啓示するのは、永遠の御霊である）の理由から、ペテロと同じように、私たちもイエスの直接的で個人的な啓示を経験することが可能なのです。

さて、次の実践的な話題に移りましょう。土台を据えたら、その上にどのように築いていきますか。冒頭で、建築するという比喩を用いたことを思い出してください。そこで、極めて重要で実践的な問題は、土台の上にどのように建てるかです。マタイ 7 章の最後で、よく知られているイエスのたとえ話があります。賢い人と愚かな人がそれぞれ違った方法で家を建てる話です。マタイ 7 章２４節からです。

> *「だから、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行う者はみな、岩（岩盤、ペトラ）の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたが、それでも倒れませんでした。岩の上に建てられていたからです。また、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行わない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもそれはひどい倒れ方でした。」*

まず重要なのは、それぞれの家は同じ試みを受けるということです。試みを受けない家はありません。同じ嵐が両方の家に打ちつけます。クリスチャン人生は、嵐のない人生ではありません。あなたは嵐を経験します。神は、あなたには嵐が起こらないことを保証していません。事実、パウロとバルナバは、初代教会でこう言いました。「私たちが神の国に入るには。多くの苦しみを経なければならない。」もし、

あなたが苦しみのない道を歩んでいるなら、その道が神の国に続いているかどうか疑問です。なぜなら、パウロは、「私たちが神の国に入るには。多くの苦しみを経なければならない」と言ったからです。なぜ、私たちが苦しみを通るのかを説明することは今日の話の範囲ではありませんが、信じてください。神はそのことに目的を持っておられます。もし、今あなたがその苦しみの中を通っているなら、あきらめないでください。神はあなたを切り抜けさせ、最後には、神があなたを取り扱い、他の方法では学ぶことができないことを教えてくださったのだと知るでしょう。

私はどのようにしてそれを知ったと思いますか。個人的経験からです。私は理論を解くことはめったにありません。

では、賢い人はどのように建てましたか。とてもシンプルな 2 つの方法です。イエスのことば、聖書のことばを聞いて行うことによってです。あなたはどのようにその土台を据えることができるでしょうか。まったく同じ方法です。聖書が語っていることを聞いて、それを行うのです。ただ聞くだけの者にならないでください。なぜなら、聖書にはそのような約束はないといって、ただ聞くだけの人になるのではなく、聞いて行う人になってください。それは実践的です。聖書の教えとイエスの教えをあなたの人生に適用することです。それを続けていくとき、神はあなたに、真理を適用する必要がある新しい領域を開き続けてくださるのです。

私はクリスチャンになって 50 年以上になりますが、神は、みことばの適用のために新しい道を示し続けてくださっています。私の人生の中でみことばを適用する必要がある新しい領域です。私の建物はまだ完成しておらず、建築中です。しかし、いくつもの嵐をうまく通り抜けさせてくださってきたことを感謝します。

ルカ 6 章に、とてもよく似たもう一つのたとえがあります。それには重要なことが付け加えられています。ルカ 6 章 46 節から 49 節を開けてください。語っているのは、イエスです。

> *「なぜ、わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、わたしの言うことを行わないのですか。」*

これは重要な質問です。イエスに従わないなら、イエスを主と呼ぶことは無意味です。なぜなら、「主」という呼称は、従うべき人という意味だからです。イエスは、あなたの生き方に影響を与えない、口先だけの告白に注意しなさいと言われました。
そしてこう続けています。

> *「わたしのもとに来て、わたしのことばを聞き、それを行う人たちがどんな人に似ているか、あなたがたに示しましょう。その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、それから家を建てた人に似ています。洪水になり、川の水がその家に押し寄せたときも、しっかり建てられていたから、びくともしませんでした。聞いても実行しない人は、土台なしで地面に家を建てた人に似ています。川の水が押し寄せると、家は一ぺんに倒れてしまい、そのこわれ方はひどいものとなりました。」*

ここで、マタイの福音書にはない、ある重要な詳細がルカの福音書に加えられています。それに気づ

きましたか。その人は、岩盤に届くように地面を深く掘り下げなければなりませんでした。岩盤の上に建てるためには、多くのものを取り除かなければなりませんでした。そして、それは、私たちの大多数にも当てはまります。すべての人ではないかもしれませんが、名目上のクリスチャン文化の中で育った人の多くは、岩に届くまでに多くの邪魔なものを取り除かなければなりません。また、まったくクリスチャン文化の背景がない中で育った人たちも、多くのものを取り除かなければなりませんが、取り除くものは異なるでしょう。

みなさんに、深く掘り下げて取り除く必要のある 5 つを提案します。一つは、「伝統」です。すべての伝統が悪いわけではなく、良い伝統もあります。すべての伝統を捨てようとは思いませんが、イエスは当時の人々に、「こうしてあなたがたは、自分たちの言い伝えのために、神のことばを無にしてしまいました」と言いました。聖書に沿っていない伝統を信じ、それに基づいて行動しているのです。イエスは、今日のユダヤ人たちにも、全く同じことを言うでしょう。しかし、ユダヤ人だけに当てはまるのではありません。それはクリスチャンの背景を持った私たちも、伝統や、行動様式、言葉遣いなど、聖書に沿っていない不必要な伝統を受け継いでいます。ですから、私たちはとても注意深く吟味しなければなりません。
特定の提案をすることは控えますが、提案できることはたくさんあります。

二つ目に、私たちは「偏見」を取り除く必要があります。これまで一度も偏見を持ったことがない人はいないはずです。それをすでに処理した人もいるかもしれません。しかし、偏見にはいろいろな種類があります。人種の偏見もあります。悲しいことですが、今日の世界は人種的な偏見に満ちています、例えば、南アフリカのような素晴らしい変化を遂げた国もあります。そこでは、人種的な偏見が特定の人々を教会から排除していたのです。恐ろしい考え方です。しかし、人種的な偏見はその地域だけではありません。アメリカは人種的偏見に満ちており、多くの場所で現在もあるのです。

私はイギリス人ですが、イギリス人も偏見を持っています。私はそのような人々の中で成長したので、深く掘り下げて、それらの偏見を取り除かなければなりませんでした。私の家系はインド出身で、代々、インドでイギリス軍に仕えました。私は 12 歳くらいの時、昼食中に何気なく、「どうしてお昼ごはんにインド人を呼ぶことができないのかな」と言いました。家族は恐れのような反応をしました。何か理由があるのだろうとは思いました。あとになって、それが偏見であると気づきました。私は異なる人種の背景からさまざまな人々を見ていますが、人種的偏見から解放されている人はほとんどいません。

そして、教団教派の偏見もあります、多くの人は特定の教団に対して、どこか否定的な見方をします。私自身、ある特定の教団に属している人の話を聞くと、その人に会ったもこともないのに、彼らに対して反対の立場的な態度をとってしまいます。「彼らは、あのように考え、こういうところが間違っている」などと考えるのです。経験から言うと、会うまでは、人のことを決して裁かないことです。どうか教団教派の偏見を持たないでください。

三つ目に、「社会的偏見」です。私も、その中で育った一人です。私はイギリスの有名な中高、イートン校とケンブリッジ大学で教育を受けましたが、自分がそのような偏見を持っていることさえ気づきませんでした。私は世界の人たちがどのような生活をしているのか知りませんでした。そして私はイギリ

ス軍に入隊し、さまざまな人たちと一緒に生活することになり、自分のイギリス人についての知識がいかに乏しかったかに気づき始めました。その軍での 5 年半の経験を神に感謝します。私の多くの社会的偏見を取り除くことになったからです。軍の将校の家庭に育った私は、そのレベルの生き方に慣れており、何も学んではいませんでした。あなたが同じ階級の人と知り合っても、違いは見えません。しかし、下の階層からの人と出会うと、違いが見えるのです。私は、「神さま、私は下の階層の人からはどのように見えるのでしょうか」と常に聞くことにしています。

このように、様々な偏見があり、個人的な偏見もあります。声が大きい人が嫌いな人もいます。赤い髪の人が嫌いな人もいます。ほとんどの人が、実にくだらない個人的な偏見を持っています。私は、リンゴをむしゃむしゃと音を立てて食べる人に偏見を持っています。その偏見と戦っているのですが、まだ偏見が残っています。

それ以上に、先入観というものがあり、イエスがどのような方であるかについて間違った見方をしている人々がいます。異邦人のイエス、柔和で穏やか、クリスマス・パーティに登場するイエスなど、それらは本当のイエスではありません。イエスは全く異なるお方であり、非常に衝撃的なお方であり、私たちの偏見と先入観を取り除くお方です。

私たちは、他にもいろんな形で先入観を持ちます。クリスチャンになることについての先入観があります。先述のように、私は育った背景から、「もしクリスチャンになったら、残りの人生はみじめになる」と考えていました。パット・ブーンのように、「天国は地上でのみじめな 70 年に見合う場所ではない」と考えて、イエスに出会うまでは、私はクリスチャンになる可能性を完全に排除していました。

そして、四つ目に、「不信仰」です。これは非常に危険です。私は、講壇に立ってメッセージをするとき、自分も含めて全員が不信仰を捨てることから始めることがあります。なぜなら、私たちの多くが様々な領域で不信仰に悩まされているからです。私たちの思いが、信仰に対してしっかりと開かれていないのです。

最後の五つ目に、これが一番重要だと思いますが、「反抗」です。あなたは、「私は反抗的ではありません」と言うかもしれません。いいえ、あなたは反抗的です。もし、それに気づいていないのなら、あなたは反抗的であり続けるでしょう。神学的な説明はしたくありませんが、アダムの子孫はみな、内側に反抗を持って生まれてくるのです。私たちは反抗的であることを知って、それを取り扱わなければなりません。神は反抗のための解決策を一つだけ持っておられます。それは何でしょうか。神は人を教会に行かせたのでもなく、黄金律を教えたのでもなく、聖句の暗記をさせたのでもありません。死刑にすることです。しかし、神のあわれみは、私たちの死刑を、2000 年前にイエスが十字架で死なれたことに引き替えてくださったことです。私たちの古い人は、イエスとともに十字架につけられました。私たちは、自分たちの内側に反抗的なものがあることを認め、それを十字架につけることを躊躇しないことです。

これはクリスチャン生活においてとても重要なことなので、聖書を開いてみましょう。あなたは聖書をどのようにとらえていますか。イエスと同じようにとらえていますか。ヨハネの福音書 10 章 35 節を

見てみましょう。

「もし、神のことばを受けた人々を、神々と呼んだとすれば、聖書は廃棄されるものではないから…」

これは非常に重要な聖句です。なぜなら、イエスはこの中で、聖書の二つの呼び方を用いているからです。「神のことば」と「聖書」です。聖書を「神のことば」と呼ぶとき、それは人から出たものではなく、神から出たものであることを意味しています。人を介して来ているかもしれませんが、それは神から来たことばです。

そして、「聖書」とは限定的な表現です。それは書き記されたものという意味です。神は文字になっていないことも多く語りました。しかし、聖書を治める聖霊により、神の語られたことのうち、神が書き記されるべきだと考えたものが書かれています。それが聖書です。「書かれたもの」という意味です。

それに関して、イエスは一つのシンプルでわかりやすい宣言をしています。「聖書は破棄されるものではない。」聖書の霊感や権威については、いくらでも議論することができますが、イエスはただ、「聖書は破棄されるものではない」とだけ言われました。聖書には絶対的な権威があります。聖書はすべて成就されます。聖書に書かれていることは、すべて正確に実現します。あなたはそれに反対することも、否定することもできますが、それを破棄することはできません。実際、もしあなたが聖書を否定するなら、最終的には聖書があなたを砕いてしまうでしょう。聖書は破棄することができないのです。

声を合わせて、私と一緒に言いましょう。「聖書は破棄されるものではありません。」

もし誰かと一緒にこのメッセージを聞いているなら、隣の人の目を見て言いましょう。「聖書は破棄されるものではありません。」

高等批評（聖書の起源と意味を決定するための科学的研究）と呼ばれるものがあり、これは聖書をばかげた空想の対象にして、最終的に聖書をまったく無益にしてしまうものです。悪魔が私たちの人生にしたいことは、聖書の権威と正確さに対する私たちの信仰を損なうことです。しかし、私たちもイエスのようにシンプルに、聖書は破棄されるものではない、と言えばよいのです。「サタンよ、今の言葉が聞こえたか？　聖書は破棄されるものではない。」

次に、私が言いたいことは、聖書は神のことばであるだけではなく、イエスご自身が神のことばであるということです。これは、ヨハネの福音書の二箇所で言われています。1 章 1 節。

「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」

これは、イエスのことです。イエスはことばであり、今も変わらず、ことばです。

そして、1 章 14 節。

「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」

私たちはクリスマスでイエスが生まれたことを祝いますが、実際に生まれたのはその季節ではありませんでした。しかし、とにかく「ことばは人となった」のです。そしてイエスは常に「ことば」でした、永遠に神とともにあった「ことば」です。

イエスは再臨の時、どのように戻って来られるか知っていますか。どのような名前でしょうか。黙示録 19 章を見てください。イエスが最初に来られた時には、「ことば」であり、戻って来られるときも、「ことば」であることに注目してください。これは、イエスが栄光とともに天から来られ、地上に王国を確立する様子です。黙示録 19 章 11-13 節です。

> *「また、私は開かれた天を見た。見よ。白い馬がいる。それに乗った方は、『忠実また真実」と呼ばれる方であり、義をもってさばきをし、戦いをされる。その目は燃える炎であり、その頭には多くの王冠があって、ご自身のほかだれも知らない名が書かれていた。その方は血に染まった衣を着ていて、その名は『神のことば』と呼ばれた。」*

つまり、イエスは昨日も今日も、いつまでも「ことば」なのです。

そのことは、非常に重要なことを導き出します。イエスと聖書の間には完全な一致があることです。一方に対するあなたの態度は、他方にも当てはまるということです。イエスを信じていて、聖書を信じないことはできません。そのことを理解できますか。イエスは神のことばです。イエスは人となったことばです。聖書は、書き記された神のことばです。一方に対する態度は、もう一方に対しても同じでなければなりません。その 2 つの間には完全な一致があります。

このメッセージも終わりに近づきましたので、ここでヨハネの福音書 14 章にある、神のことばについての 5 つの事実を取り上げましょう。あなたにも関係があることです。わずか 3 節の中で、イエスはある意味、弟子たちとの別れのことばを言っています。弟子たちに、ご自分がもうすぐ去って行き、弟子たちだけになると警告しました。それは弟子たちにとって衝撃的な出来事で、その啓示に圧倒されてしまいました。しかしその中で、イエスは私たち信者にとって聖書がどのような意味があるかについて素晴らしい啓示を与えています。ヨハネ 14 章 19 節です。

> *「いましばらくで世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます。わたしが生きるので、あなたがたも生きるからです。」*

イエスは、ご自分を認めない人たち、すなわちこの世の人と、ご自分の弟子たちとを区別されてこう言いました。世はわたしを見なくなるが、あなたがたはわたしを見る。

そして、イスカリオテではないほうのユダが 22 節で非常に重要な質問をしています。

> *「イスカリオテでないユダがイエスに言った。『主よ。あなたは、私たちにはご自分を現そうとしながら、世には現そうとなさらないのは、どういうわけですか。』」*

ユダがそう聞いたのは、イエスが「世はわたしを見なくなるが、あなたがたはわたしを見る」と言っ

たからです。彼の質問は、なぜあなたはご自分を世には現さず、私たちには現すのですか、ということです。そして、イエスの答えは重要な真理で満ちています。23 節です。

「イエスは彼に答えられた。『だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。』」

このイエスの答えから、神のことばの 5 つの重要な事実を引き出したいと思います。一つ目、イエスは世にではなく、弟子たちにご自身を現すと言いました。世と弟子たちを区別するものは何でしょうか。神のことばを守ることです。真の弟子は、イエスのことばを守ります。また、彼らは教団教派によってではなく、みことばとのつながり方によって区別されます。それこそ、あなたを真の弟子とする、あるいは真の弟子になることを妨げるものです。それは、あなたと神のことばとの関係です。神のことばを守ることは、世から弟子たちを区別します。

今、このメッセージを聞いておられるあなたも、そのどちらかに分類されます。私たちが弟子であるなら、神のことばを守ります。もし、神のことばを守らないなら、私たちは世、すなわち、イエスの主権の下にない世界に属しています。

そして二つ目の真理は、「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです」と言われたことです。神のことばを守ることは、弟子たちの神に対する愛の究極のテストです。愛は従順の動機となります。信者として、私たちは恐れによるのではなく、愛に動機づけられていることを理解しなければなりません。ある意味、律法は恐れという動機を利用しました。もし、このことをしたなら、罰せられるというものです。しかし、それではうまくいきません。私は多くの子どもたちを育ててきました。子どもが親にコントロールされている間は、恐れを利用することができます。しかし、いったん親元を離れると、恐れに動機づけられてきた子どもたちは変わってしまいます。彼らが忠実で誠実であり続けるための唯一の動機は、愛です。父なる神とイエスは、恐れの上にではなく、愛の上に建てるという知恵あるお方です。ですから、神のことばを守ることは、弟子たちの神への愛の究極のテストなのです。「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」愛が、従順の動機なのです。

また、イエスは言われました。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し…」これが三つ目の素晴らしい事実です。神のことばを守ることは、神が特別な愛で私たちを愛してくださることにつながるのです。神は、ある方法で全世界を愛しましたが、イエスの真の弟子たちには、全く異なるレベル、異なる種類の愛を持っておられます。

ここで、ユダの質問を考えてみましょう。「主よ。あなたは、私たちにはご自分を現そうとしながら、世には現そうとなさらないのは、どういうわけですか。」イエスの答えはこうでした。「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」では、キリストはどのようにして私たちにご自身を現すのでしょうか。みことばを通してです。ことばを守ることによって、私たちはイエスをさらに知ることができます。これが四つ目の事実です。私たちは素晴らしい霊的体験をするかもしれません。第三の天へ引き上げられるなどのようなことがあるかもしれません。しかし、

そのようなことはほとんどの人には起こらないことであり、神ご自身やイエスご自身を現す基本的な方法ではありません。その方法とは、神のことばを守ることによってなのです。

そして最後に、これは驚くべきことばです。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。」聖書で神について複数形が用いられる箇所は非常に少ないのですが、これはその一つです。イエスは、「わたしたち、すなわち、わたしの父とわたしは、その人のところへ来て、ともに住む」と言っています。それは、息をのむような宣言で、父なる神と神の御子が来て、私たちと一緒に住むことを望んでおられるという驚くべき啓示です。父と御子は私たちを個人的な住まいにしたいのです。どのようにしてそれは実現するのでしょうか。みことばを通してです。もし私たちがみことばを愛さず、ことばに従わないなら、神は私たちと共に住む場所を設けてはくれません。

また、このメッセージの終わりに、とても重要なことを言わせてください。あなたは神のことばを愛する以上に神を愛することはできません。ですから、自分がどれくらい神を愛しているか、また、あなたの人生の中に神がどれくらいの場所を占めているかを知る方法があります。あれこれと推測する必要はありません。ただ、「私はどれくらい聖書を愛しているのか、私の人生の中で聖書はどれくらいの場所を占めているのか」と自問すればいいのです。なぜなら、それと同じくらい神を愛しており、同じくらい人生を神にささげているかということだからです。

重要なことなので、聖書についての 5 つの事実あるいは真理をまとめておきましょう。多くのクリスチャンは微妙な位置にいて、何が光で、何が闇なのかよくわかっていません。彼らは願望や希望は持っていますが、本当のところがよくわかっていません。その理由は、神のことばを人生の正しい位置に置いていないからです。

一つ目、神のことばを守ることは、真の弟子と世を区別する。

二つ目、神のことばを守ることは、弟子たちの神への愛の究極のテストである。愛は私たちの従順の動機であり、恐れではない。

三つ目、神のことばを守ることは、弟子たちに対する神の愛の究極の理由である。神は弟子たちを特別な方法で愛されている。神は全世界を愛しておられるが、弟子たちへの愛は特別なもの。しかし、神が愛しておられる弟子たちとは、神のことばを守る人々のこと。もしあなたが、神から特別の愛を受けたいなら、神のことばを守らなければならない。

四つ目、神のことばを守り、従うことによって、神のことばを通してキリストはご自身を私たちに現してくださる。質問は、「主よ。あなたは、私たちにはご自分を現そうとしながら、世には現そうとなさらないのは、どういうわけですか」だった。イエスは、「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。それがわたしの現し方です」と言われた。

そして最後の五つ目、神のことばを通して、父と御子が来て、私たちと共に住まれる。これはすごいことです。息をのむほどです。父なる神と御子が私たちと共に住むことを願っていますが、それは

私たちが神のことばを守るときにだけ、そうしてくださるのです。

祈りましょう。

天の父よ。あなたのことば、神のことば、聖書をありがとうございます、それは、私たちの足のともしび、道の光で、確かで権威あり、誤りのないことばです。主よ、今これを聞いているお一人おひとりがいくらかでもこの言葉によって気づきが与えられ、あなたのことばを愛する者となるようにしてくださるように祈ります。あなたの恵みにより、私たちにあなたのことば、聖書が与えられています。それを私たちの人生に正しく据え、主イエスの本当の弟子となることができますように。イエスの御名によって祈ります。アーメン。